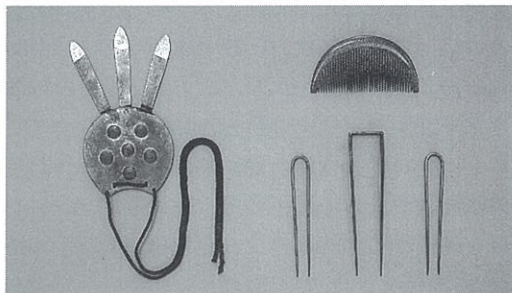


文化学園服飾博物館だより

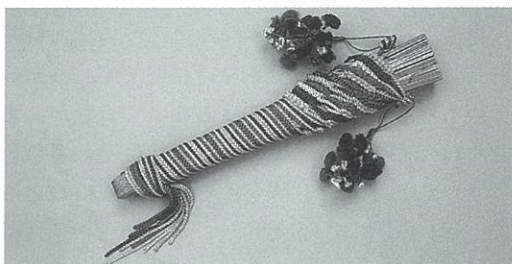
第6号 1993. 4. 1



五衣・唐衣・裳（十二単） 昭和3年 賀陽宮敏子妃着用 賀陽宮家旧蔵



髪上具



櫛扇

◇博物館の思い出◇

学校法人文化学園理事長 大沼 淳
文化学園服飾博物館館長

文化学園を特色づけるためには、立派な服飾博物館を持たなくてはならないと思い立てから、もう30余年になる。

たしか、昭和33年頃かと思うが、はじめて学院の資料室に入った時のことだ。そこには大きなガラスケースが置かれ、中に、賀陽宮家旧蔵の束帯と十二単が上段に飾られてあった。そして脇の簞笥の中には、旧陸軍被服廠が収集したといわれ、寄贈を受けた清朝宮廷服や中国大陆の各民族服が300点ほど保管されているのを見た。

こんなすばらしい服飾資料があるのだから、更にこれを充実して服飾博物館を作ろうと決意したのだった。それから毎年わずかではあったが、予算をさいて資料の収集に当たった。幸いなことに、当時はまだ古着の値で貴重な資料が手に入ったし、外国の資料もその購入が今ほどきびしくはなかった。

そんな決意をして、資料収集にあたると続々と貴重な資料が手に入った。正倉院裂、平安・鎌倉時代の東寺裂、宮廷服、三井家、渋沢家等々名門から江戸時代の小袖をはじめ明治、大正期の大礼服等、また、西洋のものは、ニューヨークのコレクター、カニングハム氏から300点に及ぶ18世紀から20世紀前半の作品が手に入り、エジプトのコプト裂やプレ・インカの裂等々貴重な資料も収集でき、10年目に最初の常設展示場として図書館の4階に展示室を設け、さらに10年たって、やっと遠藤記念館の中央に「文化学園服飾博物館」を公開することができ、そのときの感激は今でも忘れることができない。その間初代博物館館長となった故遠藤武教授の功績を忘れることはできない。先生の力をかりてここまで充実出来たといえる。それから14年をへた。この博物館も、社会的に貴重な存在となり、文化祭を中心に行われる特別展には万を越える人々が訪れてくれ、外国からの来訪者も目をみはってくれる。21世紀には、世界に向かっての情報発信基地として、また世界的資料30,000点以上をもつ博物館として機能させたいと思う。

'92年度活動報告

◇展 示◇

【服飾の世界】 3月10日～5月22日

服飾は、人間生活にとって欠かせないものであり、世界各地で多彩な展開をとげてきました。服飾の上には、風土と生活、民族と時代、伝統と流行など、各地域の文化を形作るあらゆる要素が反映しており、服飾の材質・染織技術・形態・意匠などにその特色を認めることができます。展示では、所蔵品の中から多種多様の服飾を取りあげ、日本・アジア・西洋の地域別に展示。日本は小袖、仕事着、陣羽織、髪飾り、袋物など、アジアは多様な民族服飾の中から中国、台湾、フィリピン、インドネシア、インド、パレスチナの服飾品、西洋は18世紀中頃から現代までの時代の流れを代表するドレスを中心として構成しました。



【服飾と色～白・赤・黒～】 6月10日～9月18日

色は人々の生活のあらゆるところに使われているものであり、欠かすことのできない存在です。多数の色が氾濫している現在、色によってはある一つの色が、世界共通の意味を持つこともあります。展示ではその多数の色の中から、古くから象徴的な意味をもって用いていたと考えられる白、赤、黒に焦点をあてました。それぞれの色に儀礼的要素の濃い日本を中心に、西洋、アジア各地の服飾を取りまぜ、各地域で服飾に対して持っている白、赤、黒の色の意味を探ってみました。清潔、純真、神聖などに象徴される白。最も刺激的でめだち、太陽、活力、慶祝などのイメージをもっている赤。闇を意味し、喪服、礼服、日常着に好まれ、粋で洗練された趣味のよい色としてとらえられる黒に分けて展示しました。



【特別展 刺繍の世界】 10月16日～11月25日

刺繍は、いつの時代にもいずれの民族にも見られるもので、人間の装飾意欲を満たしてくれる最も基本的な手の技といえます。針と糸を用いて布にさまざまな模様を自由に表わすことができる刺繍は、古くから世界各地で行われていました。それぞれの地域では、民族性を反映して独自の刺繍が発達し、多様な刺繍の世界が展開されています。本展では、館蔵品を日本、アジア、西洋の地域別に紹介いたしました。日本は江戸時代後期から明治時代の小袖、帯、袋物、袱紗など、アジアは中国清朝の宮廷衣裳、インドの衣裳、掛布、イランの布など、西洋は17世紀の祭服、18世紀の男子服、アール・デコのドレスなどを展示しました。



【特別展 第7回旧ソ連邦民族衣裳展 アルタイの民族衣裳】 '92年12月15日～'93年2月19日

毎年12月から翌年の2月まで、旧ソビエト連邦各共和国の民族衣裳を紹介しています。10年計画で、1986年より始まったこの衣裳展も7回目の今回は、アルタイ共和国の民族衣裳を取り上げました。アルタイは西はカザフ、南は中国、モンゴルと国境を接する国で、1991年ロシア連邦に属する独立共和国となりました。羊のなめし革製の外衣を中心に民族衣裳画、楽器などアルタイの民族文化を紹介する資料を、アルタイ共和国郷土博物館から借用し展示しました。また今年の2月1日にはアルタイ共和国から副首相を初めとした3名の代表団を迎え、交流を深めました。



テープカット 左より大沼館長、ベレコフ副首相、コンチエフ文化委員会議長、エルキモフアーアルタイ共和国郷土博物館館長

◇ロスアンゼルスで三井家伝来小袖展示◇

1992年11月15日よりロスアンゼルス郡立美術館において華麗な小袖展『When Art Became Fashion—Kosode in Edo-Period Japan—』（「アートがファッションになりし時—江戸時代の小袖—」）が開催されました。服飾博物館からは三井家伝来の小袖の名品「緋綸子地山桜鴛鴦模様縫紋小袖」と「白綸子地梅御簾模様縫紋小袖」の2点、帯2点が貸し出され、展示のみならず、招待状、ミュージアム・ショップのカレンダーやポスト・カードなどに美しくプリントされ大変好評でした。展示は日本でも見られない大規模なもので粒よりの作品群が並びました。5年の歳月をかけて準備され、担当のグリュックマン、タケダ両ロスアンゼルス美術館学芸員が何度も来日し調査にあたり、見事な大型図録が作成されましたが、そのスケールの大きさはすばらしいものでした。オープニングに合わせて企画されたシンポジウムには、日本から多数の専門家が招へいされ、服飾博物館からは道明三保子学芸室長が『The Mitsui Family's Patrimonial Kosode and Maruyama Okyo』（「三井家伝来の小袖と円山応挙」）の講演を行いました。また展示に協力した博物館として植木淑子学芸員が招かれ日米の学芸員との交流を深めました。アメリカでは最近Wearable Art（着るアート）と称して伝統を活かした美しい織物で衣服を作ることがさかんですが、オープニング・パーティーやシンポジウムでも色とりどりのファッションが見られました。江戸時代の小袖こそそのはしりで、この展示会の意義のひとつも洗練されたWearable Artを見せることにあったと思われ、高い関心を呼びました。展示会を支えるボランティアの人々の活動、美的センスが光るアート・ディレクターの存在など服飾博物館にとって学ぶべきことの多い有意義な交流でした。

◇収 集◇

祭礼用襟飾り チベット 1575年頃（明代） チベットで行われる祭礼の衣裳に付けた襟飾りで、中国製の刺繍裂を接ぎ合わせて作られています。壽や喜、鳳凰、靈芝、桃など中国の様々な吉祥文を主に、中国皇帝の祭服に用いた模様の一つである、月の中で薬を作る兎の姿などを紗地に総刺繍で表わしています。

'92年度の資料収集総点数は306点（購入221点、寄贈85点）です。主な購入資料はインド、トルクメン、アフガニスタン民族衣裳他(43)、インドネシア、インド、ブータン、ナイジェリアの民族衣裳(14)、チベット祭礼用刺繍襟飾り他(7)、小袖、振袖、夜着、袱紗他(31)、紹刺し帯地、鎧下着他(3)、パキスタン、パトゥ、バルマン、キャロ姉妹ドレス他(7)、バッグ(45)、タイ山岳民族衣裳(64)などです。

寄贈者および寄贈資料は次のとおりです。寄贈者：李方子妃筆彩色水墨画(1)、寄贈者：ペルーの民族衣裳(1)、寄贈者：ミャオ族の衣裳他(2)、寄贈者：「青少年學徒ニ賜ハリタル勅語」(1)、寄贈者：刀[銘 武蔵太郎安国]他(2)、寄贈者：海軍制服付属品他(2)、寄贈者：羽織紐(15)、寄贈者：長着、羽織、帯他(60)、寄贈者：御祝膳用具一式、供膳御式具一式、御三ヶ夜餅函他(7) 資料収集にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。敬称は略させていただきます。()内は点数



祭礼用襟飾り

◇資料の館外貸出など◇

○資料貸出 5件15点 ○フィルム貸出 32件98点 ○撮影許可 6件27点 ○特別観覧 4件13点

初代館長遠藤武先生を偲んで 文化学園服飾博物館の初代館長を勤められた遠藤武先生におかれましては12月10日享年80歳にてご逝去されました。遠藤先生は帝室博物館、文部省資料館、和洋女子大学に勤務した後、'65年に文化女子大学の教授となり、'79年より'86年まで服飾博物館の館長を兼務されました。服飾博物館開館以前より資料収集を精力的に行い、今日の服飾博物館所蔵資料の基礎をつくられました。専門の日本服装史の立場から、特に日本関係資料の収集に尽力され、豪商三井家の小袖を初めとして、宮家や大名家の貴重な資料を収集されました。遠藤先生のご冥福をお祈りいたします。



'93年度展示案内

『服飾の世界』 3月10日～5月21日

館蔵品の中から服飾に関する優品を中心に、日本、西洋、アジア・アフリカに分けて古今東西の服飾の美を幅広く紹介します。「日本」は陣羽織、小袖、桂袴、袋物、髪飾りなど、「西洋」は18世紀中頃から1930年代までの時代の流れを代表するドレスを展示します。また、「アジア・アフリカ」は多様な民族服飾の中から韓国、インド、タイ、西アフリカなどの衣裳を取り上げます。

『特別展 パレスチナとヨルダンの民族衣裳』 6月10日～9月17日（6月23日・8月1日～8月16日は休館）

パレスチナとヨルダンの民族衣裳と装身具等300点余りからなるカワール・コレクションを紹介します。このコレクションは、1950年ごろから相次ぐ紛争のなかパレスチナ人のウィグード・カワール女史によって精力的に集められました。宗教と文化の交差点であるパレスチナとヨルダンの地は特色ある服飾の宝庫です。三角形の大きな袖をもったドレス、丹念なクロス・ステッチを主とした刺繍によって表わされる町や村など地域ごとに異なる模様、幾重にも飾られる装身具などから豊かな民族文化を感じ取っていただけるでしょう。



『特別展 井伊家伝来能装束』 10月15日～11月22日

当館所蔵の彦根藩主井伊家に伝来した能装束を一堂に展示します。能は江戸時代に幕府の式楽と定められ、各大家でも演能がさかんに催されました。彦根三十五万石の藩主井伊家も藩祖以来能楽に力を入れ、多数の能装束が伝えられています。本展では唐織、厚板、縫箔、摺箔、狩衣、長絹、水衣など役柄によりそれぞれ定められたさまざまな種類の能装束を展示します。一般の服飾とは異なり、洗練され様式化した舞台衣裳である能装束の意匠や染織技術をご鑑賞下さい。



『特別展 第8回旧ソ連邦民族衣裳展』 12月16日～2月18日（12月23日～1月5日は休館）

『旧ソ連邦民族衣裳展』は'86年より毎年開催されているもので、これまでに極東地方、バルト三国、ヤクート、ブリヤート、ウクライナ、トルクメン、アルタイの民族衣裳を紹介してきました。今回は8回目となりますが、取り上げる共和国については未定です。

利 用 案 内

【開館時間】 平日:午前10時～午後4時30分／土曜日:午前10時～午後3時(入館は閉館の30分前まで)

【休 館 日】 日曜日・祝日・年末年始・夏期休暇／学園の創立記念日(6月23日)／展示替の期間

【入 館 料】 一般300円・学生200円(20名以上の団体は一般200円・学生150円) 特別展は別料金

※文化学園の職員・学生、及び職員が同伴する方は無料